

ショートメッセージ

2022年10月30日(日)「エルサレムへの想い」

聖書箇所：ネヘミヤ2：1－10

暗唱聖句：あなたの僕の祈りとあなたの僕たちの祈りに、どうか耳を傾けてください。

(ネヘミヤ1：11)

今週の聖書教育誌の週題は「エルサレムへの想い」です。ネヘミヤ記に登場するハカルヤの息子であったネヘミヤはバビロン捕囚から解放されたイスラエル人の一人でしたが、バビロンの文化に馴染み、また、ダニエルのようにバビロン、ペルシャの治世となっても帰還することなくペルシャの行政官として優遇されていた一族であったのでしょう。

エルサレムでの第二神殿再建は地元の居住者やサマリヤ人から様々な妨害を受けて頓挫していました。サマリヤ人は捕囚時代にイスラエルの地に定住し、イスラエルと同じ真の神を信仰しているとして、神殿再建の資格があると申し出ましたが、帰還したイスラエルの民は彼らの信仰が純粹ではないとして断ったのです。このため彼らの執拗な妨害工作を受けたり、イスラエルの民自身も自分の生活優先の考えも重なり神殿再建の仕事も神のことも次第に脇に押しやってしまいました。

その状況から預言者ハガイ、ゼカリヤが立ちあがり、民を励まして紀元前515年に神殿はようやく完成し、神にささげられました。神殿再建と王国復興を夢に見て帰還したイスラエルの人々でしたが、ペルシャは王国復興は認めず、祭司が指導する信仰共同体として成立していきました。やがて、この指導層がサマリヤ人や周辺民族と結びつき、イスラエルの正統性は損なわれていきました。このような状況で神殿再建は実現したものの、イスラエルは混乱と不幸のなかにありました。第二次帰還民として預言者エズラが紀元前458年に帰還してから民族の信仰回復運動が始められました。ネヘミヤはこのような時勢の時にエルサレムの城壁の再建や社会秩序の回復の使命を神から受けた人でした。

ネヘミヤ 1:3 彼らはこう答えた。「捕囚の生き残りで、この州に残っている人々は、大きな不幸の中にあって、恥辱を受けています。エルサレムの城壁は打ち破られ、城門は焼け落ちたままです。」

ネヘミヤ 1:4 これを聞いて、わたしは座り込んで泣き、幾日も嘆き、食を断ち、天にいます神に祈りをささげた。

この報告(紀元前445年)を受けてネヘミヤは**エルサレムへの想い**を祈りました。ネヘミヤもバビロンにダニエルのように残った人でしたが異教の社会の中であっても真なる神への信仰は失うことはありませんでした。彼は王の信頼厚い献酌官でもありました。

献酌官の働きは王のためにぶどう酒を味見・毒見する危険な仕事であり、王の絶対的な信頼がある人物でしか就くことのできない役職でした。

ネヘミヤがいつものように王のぶどう酒を味見していたときに王はネヘミヤにこう尋ねました。

2:2 王はわたしに尋ねた。「暗い表情をしているが、どうかしたのか。病気ではあるまい。何か心に悩みがあるにちがいない。」

ネヘミヤは神に祈って、王に答えました。

2:5 王に答えた。「もしも僕がお心に適い、王にお差し支えがなければ、わたしをユダに、先祖の墓のある町にお遣わしてください。町を再建したいのでございます。」

ネヘミヤは自分の想いだけに捉われることなく、神の意思に聴いています。このことに私たちは励まされます。祈りの大切さを教えられます。彼は自分の同胞が帰還した故郷で辛い思いや迫害を受けているのにも拘らず、自分は安全なバビロンに居ることに葛藤を覚えたのかもしれませんが。しかし、彼は行政官としての知恵を神から与えられていました。預言者エズラは宗教指導者としての働きは出来ましたが政治的な権力はなく、混乱したエルサレムの社会秩序を回復することは困難でした。一方でネヘミヤは行政官としてエルサレムの地に就くことが王から許され、預言者エズラの成し得なかった政治的な決定をすることが出来てイスラエル社会を混乱させた他民族勢力を切り離し秩序を回復することが出来ました。

このように神は混乱したイスラエルの社会を回復するために預言者エズラと行政官ネヘミヤを送られたのです。神のなさる業は時に叶って美しいと言われてるように、どちらか一人だけでは城壁の回復も、信仰の回復も、社会秩序の回復も実現することは困難であった筈です。

ネヘミヤ 1:11 おお、わが主よ、あなたの僕の祈りとあなたの僕たちの祈りに、どうか耳を傾けてください。わたしたちは心からあなたの御名を畏れ敬っています。どうか今日、わたしの願いをかなえ、この人の憐れみを受けることができるようにしてください。

一方でこの時に追放されたサマリア人は自分たちこそ正統な真の神の継承者であるとして今日までも、その信仰を守っています。イエスさまの時代もサマリア人との交わりは一切しないとしたユダヤ人でしたが、イエスさまは違いました。ユダヤ人もサマリア人も私たち異邦人も共に神の愛される子どもとして受け入れてくださっていることは私たちの救いであり感謝です。

イエスさまやネヘミヤから教えられることは、み言葉に聴く事、祈る事のなかで信仰生活を送るときに、祈りの課題や使命を与えられたならば、それは神からの働きかけがあるということです。その願いや使命を成し遂げられるためには絶えず祈る、すべての歩みにおいて主に拠り頼むことが必要なのです。その祈りは王や王妃も心痛めてネヘミヤへの暖かい言葉となりました。

2:4 すると王は、「何を望んでいるのか」と言った。

2:6 王は傍らに座っている王妃と共に、「旅にはどれほどの時を要するのか。いつ帰れるのか」と尋ねた。

王という立場の人に、これほどまでの言葉をかけられることはいかにネヘミヤが王に信頼されていたかが分かります。王はネヘミヤをユダの総督として任命してエルサレムに派遣したのです。エルサレムへの道のりは決して安全なものではありません。王に通行許可証と材木調達願いを出し適えられました。このように先に働こうとする道が開かれるのはすべて、神の恵みによることです。自分の力、自分の計画によってだけでは決して行なうことはできません。神の恵みが働くときに、そこに「道」が開かれるのです。王は将校たちと騎兵をもつてくれたのです。恵みが働くところにも敵対する者は居ることもありますが、神は逃れの道をも備えてくださるのです。

こうして、想いがあるところには「道」が主の恵みによって開かれるのが分かります。私たちの教会も会堂建設、教育館建設を祈りをもって始めました。当時、財務担当だった私は必要な資金が本当に集まるのだろうかと不信仰な思いに捉われたことがありました。けれども、そこに教会の皆さんの熱い祈りが捧げられ実現していきました。まさに主は生きて働かれることを体験させていただきました。主に拠り頼み委ねるところに神の恵みが働くのです。自分の力、自分の裁量、自分の経験・知識に頼っているだけではネヘミヤの城壁再建も私たちの教会堂建設も実現しなかったことでしょう。主の恵みと計らいに心から感謝します。

● 分かち合い

- ・ 私たちの想いを祈りとして聞き届けてくださるよう祈った経験はどなたもあることでしょうか。「時を待ちなさい」と示しをうけたことがあなたにはありましたでしょうか。
- ・ 私たちの教会の祈禱会もたくさんの方々と祈り分かち合いたいと願います。でも祈禱会ではないところでも熱い祈りが捧げられていることを覚えたいと思います。そんな祈りの輪を分かち合ってください。

(担当：H.G.)